

ジョン・ハーサニによる功利主義の正当化として、集計定理と並んで不偏的観察者定理はよく知られている。大まかに言えば、不偏的観察者定理は、不偏的・共感的・合理的な観察者による社会の選択は平均功利主義による選択と同一になるというものである。不偏的観察者定理は想像上の同感という道具立てを用いる。通常の選好は選択肢に対して持つものだが、想像上の同感においては、観察者は選択肢と個人のペアを対象とする拡張された選好という特殊な選好を持つとされる。

不偏的観察者定理の前提の一つは、拡張された選好が全ての個人に共通のものであるということである。そうでなければ、そもそも特定の社会が選ばれることすら保障されない。不偏的観察者定理に対するよく知られた批判の一つは、この前提が妥当ではないというものである。この批判は Broome(1993)に遡るものであり、批判者はブルームの批判を根拠として不偏的観察者定理の根拠は弱いと主張してきた。

ブルームの批判は、ハーサニは拡張された選好が全ての個人に共通のものであることを示せていないというものである。ハーサニは個人の性質が個人の選好に因果的に与える影響によってそれを示したつもりでいるが、その議論には穴があるとブルームは主張している。

本発表は、ブルームの批判がハーサニの議論の誤解に基づくと主張する。批判者は、ハーサニが選好という語を選択肢間の関係として用いていると想定している。これはハーサニの明示的な定義に忠実な解釈だが、発表者の見立てでは、ハーサニは選好という語を選択肢間の関係として用いながらも、選択肢に対する欲求を意味するものとしても用いている。これは一種の混乱だが、このような解釈を採用すれば、ハーサニの議論を拡張された選好が全ての個人に共通のものであることを示すものとして理解することができる。

発表者は、ハーサニの記述には選好という語を欲求を意味するものとしても用いていると解釈しないと理解できない箇所があることと、グリフィンの記述に対する晩年のハーサニの記述を根拠として以上の主張を行う予定である。本発表はハーサニの功利主義の正当化が成功していることを示すものではないが、不偏的観察者定理を再評価する基盤を与えるものである。